第 22 回 日本生殖心理学会 学術集会
P-12
東京，2025.02.16

演題名：「当院で妊孕性温存を実施した患者の語り～医療者の学びと地域医療連携の構築に向けて～」

氏名：宮喜由紀子[1)]（ミヤキ　ユキコ）（会員番号：5512）下西祥子[1)]　森分純子[1)]　藤岡聡子[1)]　福田愛作[1)]　森本義晴[2)]
1）IVF 大阪クリニック　2）HORAC グランフロント大阪クリニック

【緒言】

当院では医療連携の促進を図るため、がん治療と生殖医療に携わる医療者を対象としたセミナーを開催している。セミナーで、当院で妊孕性温存治療を受けたがん患者が、自らの体験について講演を行った。患者の講演を通して妊孕性温存に対する支援や当院が実施するセミナーの役割について検討した。

【実践内容】

患者は 30 代女性。舌癌再発の診断にて化学療法と放射線療法の併用療法を行う予定であった。妊孕性温存についてはがん治療施設内に置かれているパンフレットを手に取り初めて知った。がん治療医に相談し生殖医療専門施設の当院への紹介となった。当院受診から 13 日後に卵子凍結保存を行い、その 2 日後からがん治療を開始した。

講演では、がん治療のため休職することで今まで積み上げた仕事のキャリアが途絶える不安と、自身の動揺が伝わらないよう家族に舌癌の再発を伝える困難さについて語った。また、医療者の情報提供が患者の将来の妊孕性・家族形成に大きな影響を与えること、妊孕性温存を選択するか否かの意思決定については「生きていること」が大前提であったことが語られた。会場のディスカッションでは、「ＡＹＡ世代のがん生殖医療の体制づくりの必要性を知った」、「妊孕性温存についての知識を持っている医師が少なく、院内でもサポートする体制が構築できていないため医療者の意識を高めていく工夫が必要だ」などの意見が出た。

【考察】

患者の講演を通して、がん告知から妊孕性温存に至るまでに、病気や仕事への不安、家族への思いがあり、その中で妊孕性温存を早期に意思決定する困難さがあることが再認識された。また、近年がん・生殖医療は広く認知されるようになったが、その取り組みについてはまだまだ医療者間で温度差があることがわかった。また、情報提供の大切さを医療者に伝える機会となり、がん・生殖医療の情報提供のあり方や医療連携について共に考える機会となった。医療者が顔を合わせ共に考えるための取り組みは、妊孕性温存を必要とする患者が円滑に意思決定し早期に原疾患のがん治療を受けられる体制構築に重要であると考えられた。